

シャンデリア煌めく宮廷の舞踏会。大広間に足を踏み入れた瞬間、令嬢たちの視線が一斉にわたしたちに注がれる。みんなもちろん、露骨にジロジロと見ることはない。ある令嬢は談笑する振りをしながら口元を扇で覆い、視線だけこちらに向けている。またあるご婦人はおつきの侍女になにか言いつける振りをしながら声を潜めてなにかを話していた。

それにいちいち傷つくことはもうないけれど、思わず夫に絡める腕の力を少し強くした。

「どうしましたか？ レティシアさん」

「ううん、なんでもないの。気にしないで」

わたしを案じる夫であるクラースの、整った顔を見つめる。

冬の朝の、誰にも汚されていない新雪のように品よく輝く銀髪と、吹雪の間の晴れ間のような凜とした青い色を持つ切れ長の瞳。背もすらりと高く、才覚あふれた

若く美しい男。先代が貿易で財をなして勲章を下賜された新興貴族で家柄は古くないが、令嬢たちが熱い視線を注ぐのは無理もない。

そんな彼と結婚したのが、よりにもよって格式ある血筋のみが取り柄の重たい黒髪をした突出した才覚もない娘だったらひそひそ意地の悪い話をしたくなるにきまっている。

わたしだってもし当事者でなければ、どうしてこの二人が結婚したんだろうと首をひねったに違いない。

ふう、と気づかれないようにため息をついた。けれども、どこかわたしが気落ちしていることが夫にはわかったらしい。顔を覗きこまれて、心配そうに首をかしげられる。なんでもないわと笑って見せても、クラスはどこか納得していないようだった。

「レティシアさん、先ほど給仕がリング酒を持っていましたよ。取ってきますからここで待っていてください」

わたしの好物を覚えてくれたのか、クラスがわたしの側から離れる。おとなしくその場で待っていると、先ほどまでは遠慮がちだったおしゃべりな令嬢たちが待ち構えていたかのように話しかけてきた。

「ごきげんよう」とあいさつを交わしたが、徐々に会話の雲行きが怪しくなってくる。

「ところで、レティシア様。口さがない噂をされているのをご存じ？」

そう切り出した令嬢は氣遣ってくれているように装っているが、目が笑っていない。

「……くちさがない噂？」

「そう、レティシア様が家名でクラス様に言い寄って結婚されたのだというひどいことをおっしゃる人たちがいるんですの。まったく、失礼な方たちよねえ？」

クスクス、と意地悪く笑う彼女たちになにかそれとなく言い返さないと口を開くが、頭が真っ白になってしまふ。口のナカが渴いて、うまく言葉が出ない。

「それはひどいですね。ボクはそんなふうにしたことなんて一度もありませんよ」
「あ、あなた」

毅然とした声がした方向へ視線を向ければ、シールドを両手に持った夫が立っていた。途端に慌ててそそくさと退散しようとする令嬢たちを引き留める。

「そのような誤解をした方がいらっしやるならボクから説明に窺わなければ。いたい誰なんですか？ そんなひどい噂を広めている人は」

いつも穏やかな声にはすこし怒気がにじんでいる。令嬢たちは顔を見合わせて困っていた。

「さ、さあ、わたしも誰が最初に言い出したのかはわからなくて」

「で、ですがお二人の仲睦まじさを拝見するとどうやら事実無根の噂だったみたい

ですわね」

「お、お邪魔しました」

笑ってごまかしながら散らばるように去っていった令嬢たちの背中を見送っていると、クラスがぐいとリンゴ酒を一気に煽る。

「まったく、失礼な人たちだ。ボクが家名目当てであなたとレティシアと結婚したなんて」

まだひと月ほどしか一緒に暮らしていないが、穏やかなクラスがここまで憤るのは珍しい。公然と侮辱される妻に、さすがにプライドを傷つけられたのかもしれない。

「わたしは、仮にあなたが家の名前目当てでもわたしと結婚してくれて嬉しいわ」
声を潜めてそう告げれば、クラスにぐいと身体を引き寄せられる。

「そんなバカな冗談を言わないでください。レティシアには、そんな誤解をしてほ

しくない……」

「は、はひ」

切なく搾り出したような声に、まるで本当に想われてるようできゅうとおなかの奥が切なくなる。はしたなく欲情しているのを悟られないように、わたしはひたすらちびちびとリング酒を舐めるように飲んだ。

——今日のクラスさん、かつこよかったな。

夫婦の寝室で、ひとり物思いにふける。仕事忙しい夫は、家にいても常に忙しくしていて、一緒に寝室で寝ることは稀だ。今夜も舞踏会から屋敷へ帰ってきたあと、執事から呼び止められて着替えもせず仕事部屋へ行ってしまった。

大人三人は余裕で眠れそうなサイズのベッドにはわたし一人しかない。

「……言い返せなかったのは、結局わたしがあの人たちと同じことを考えてるからなんだよね」

今をときめく新興貴族の美男子と、古い家名以外なんのとりえもない女。家の都合で結婚した二人が愛し合っている方がおかしい。

今日夫は庇ってくれたけれど、それもきつと公共の場で妻がバカにされれば自分への侮辱にも等しいからだ。わたしのことが好きなわけじゃない。結婚して日が浅いこともあって、穏やかな彼は懸命にわたしを愛そうと試みている。そんなクラス

スにいつか冷たい瞳を向けられたらと考えると、ぞくぞくと興奮してしまう。

「……我ながら、難儀な性癖」

昔、わたしには好きな人がいた。穏やかで品がよくて、彼は金髪だったけれど少し今の夫にも似ているかもしれない。会うたびにお菓子や花をくれて優しくしてくれたけれど、彼が本当に好きだったのは美人で有名なわたしの妹だった。

それをもう隠さなくてよくなった彼から向けられた冷たい瞳はいまでも昨日のことのように思い出せるし、きつとそれがわたしの性癖がねじ曲がった一番の原因だ。

それ以来、すきなひとに愛してると囁かれるより、冷たい目で見下ろされる方が安心するようになってしまった。最初から嫌われていると覚悟すれば、傷つくこともない。思春期になって一人遊びをするようになって、最初は片想いしていた殿方とやさしく愛し合う妄想をしていた。けれど、全く没頭できなかった。ためしに一

度、冷たい目で見下ろされながら人形のように扱われる妄想をしたら、びっくりするくらい秘所が濡れてしまった。

その夜以来、ずっと好きな人に乱暴に扱われる妄想をして自分を慰めている。

「……今日、もし調子に乗ってわたしが一緒に寝ようって誘ったらイヤな顔したかもなあ」

ずっと目を閉じて、クラススの顔を想像する。いつも穏やかな微笑みがいびつに歪んで、わたしを見下ろした。

——どうしたんですかレティシアさん。ちょっとやさしくされただけで、勘違いしたんですか？

「っ♡」

想像の彼が小ばかにしたように笑った。ぞくぞくっ♡と背中が粟立って、おなか

の奥が甘く疼く。薄いキャミソールの上からおっぱいを寄せるように揉みしただけ、もう止まらない♡

——ちょっと優しくされただけで、ボクが本当にレティシアさんのことが好きだって勘違いしちゃったんですねえ。ほら、こんなにいやらしく乳首膨らませてなに期待してるんですか？

「ちがっ♡ちがうもん♡かんちがいしてないもんっ♡」

妄想のなかの彼が、意地悪く乳輪をつう♡となぞる。自分でも乳首の周りをすりすり♡すりすり♡と円を描いて焦らせば、だんだんいやらしく息が湿っていくのがわかる。

「んん♡だめっ♡」

——だめじゃないでしょ。こんなに乳首ビンビンにしておいて♡乳首いじめてほしいんですよ♡

勃起した乳首の根元に指を添えて、そのまま跳ね上げる。そうして根元と先端を何度も弾けば、また一段と硬さを増してしまう♡

——ほら、ちゃんと自分のカラダがどうなってるか言ってください♡ほら、レティシアさんの堪え性のない乳首、どうなってるんですか？

「あひ♡ちくびっ♡びんびんでっ♡カチカチでえ♡そこいじられたらおマンコまで濡れちゃうのお♡」

容赦なく自分で乳首を指で弾きながら、妄想のクラスに媚びるように腰を振る♡おまけにぐぐっ♡とかえるみたいに下品に足を広げれば、ショーツからぷくっ♡で膨らんだマン肉が少しはみ出てしまうのがわかる。

「下品なポーズで♡ちくびおにゃにーきもちい♡」

——はは♡ほんとうに情けないですねレティシアさん♡こんなザマで本当に古い格式のあるおうちのご令嬢なんですか？　こんなにビンビンなデカエロ乳首し

たエロ令嬢、きつとレティシアさんしかいませんよ♡

きゅっ♡と人差し指と親指で乳首を摘まんで、くにくに♡と左右にひねる。軽くひねるた乳首ビリビリして、おマンコ触ってないのに勝手に勝手にぬかるんじゃう♡

——はは♡セルフ開発でかエロ乳首いじめられてきもちいいですか？ すっごくコリコリになってますね♡

クラースの大きな手のひらに乳首を擦り付ける妄想をしながら、自分の手のひらにコリコリ乳首の先端を擦り付ける。手のひらでずりずり♡すると布がすれてきもちいい♡

——やらしい♡乳首の先っぽ擦り付けてきもちよくなっちゃってますね♡乳首そんなにすきなんですか？

「すきっ♡ちくびしゅきい♡」

——まったく、こんな簡単に気持ちよくなつてふしだらなご令嬢ですね♡乳首カリカリしたらあつという間にイクんじゃないですか？ レティシアさんザコ乳首だから♡

クラスが嘲笑しながら、布越しの乳首に爪を軽く立てる。ピリピリ♡と気持ちいい痺れが頭まで駆け抜けていって、きゅう♡と爪先が丸まる♡

「あふっ♡も、イキそっ♡乳首だけでイキそうっ♡」

媚びるようにおっぱいぶるぶる揺らしながら、ずーっと乳首をカリカリする♡乳頭にキャミの生地をねじ込みながら爪立てて、下品に乳首オナニーする♡カリカリする速度がだんだん早くなって、腰が勝手にヘコヘコと前後に揺れはじめる♡

「あひっ♡クラスちゃんっ♡わたひがなさけにゃくちクオナイキしゆるのみてっ♡」

脳裏に浮かぶ夫が、わたしを冷たい目で見下ろす。軽蔑するような声で変態、と

囁かれたのと同時に、乳頭から伝ってきた痺れがおなかの奥で弾けてぎゅう♡と爪先が丸まった。

「あひっ♡イった♡いっちゃったあ♡クラースさんおかずにして、乳首イキしちやったあ♡」

キャミ越しに乳首虐めしただけなのに♡パンツベトベトする♡自分でもびっくりするくらい淫乱なカラダ♡これじゃ本当にきらわれちゃう♡

——乳首イキしたおマンコ、どんなにやらしくなってるか自分で見てくださいよ♡ちゃんときけない自分のメス穴見て、どれだけザコメスカ自覚してくださいね、レティシアさん♡

本人が絶対言わないひどいセリフに従ってわたしはゆっくりとショーツを剥ぎとって鏡の前で開脚する。興奮してぷっくり膨らんだ肉土手、テラテラ光った肉ビラ、真っ赤に充血してぬかるんだおまんこ♡ぷっくりしたクリトリスなんて、触っ

てほしそうにビクビクしてる♡

——恥ずかしいメス汁まきちらして、ほんとうにいやらしい♡誰にも抱かれたことのない新品マンコのくせにこんなに発情してトロトロにして恥ずかしくないんですか？

妄想の彼はクスクス笑いながら愛液を掬ってクリトリスに容赦なく塗り付ける。発情期のメス犬みたいに荒い呼吸で同じようにすると、いやらしい肉豆がビリビリ痺れてしまう♡

「んあ♡しゅごっ♡クラスしゃんにクリトリスいじめられるのきもちいい♡もって発情マンコいじめてください♡」

いやらしい言葉でおねだりすれば、夫が不本意そうに眉を顰めながら、クリトリスを手のひらで押し潰す。ふとズボンを見れば、股間の生地がきつそうには盛り上がっていた。誰でもいいから肉欲を処理したくなってるんだ♡

「すきじゃなくていいからっ♡だいて♡わたしのことだいてっ♡クラスしゃんっ♡だいすきだからっ♡わたしっ♡」

いまこの部屋にいない男の名前を叫びながら、赤く腫れたクリトリスを揃えた指で覆って押しつぶす♡粘ついた愛液の音を響かせながら、力任せに肉豆を円を描いて押しつぶす♡

クチュクチュ♡ぬちぬち♡

こんな下品なおナニ、本人に見られたらぜったいにたくなっちゃう♡

安っぽい性欲にまみれた夫が、わたしのおマンコを乱暴に手で揺さぶる。いまから挿入するただけに行われる性急な前戯。まるで義務みたいに雑におマンコかわいがる夫の冷たい瞳を想像すると、ぷくっ♡と肉豆が腫れあがる♡

「イっ♡クっ♡クラスしゃんのこと勝手におかずにしておマンコするのよしゅぎるっ♡ごめんしゃいっ♡ごめんしゃいっ♡ごめんしゃっ♡おおっ♡ごめ

んなしやイキしちゃう♡」

愛液でドロドロのクリトリスが、ぶるぶる震え出す♡それだけじゃなくておマンコのナカの肉壁もパクパク♡と切なそうに収縮してる♡やさしい夫をおかずにして、下品開脚オナニーしてイっちゃう♡

——ほんとうにやらしいメス犬ですね♡ちゃんとイってください♡かわいくイケたらあなたのおマンコでボクのザーメン処理させてあげますよ♡ちゃんとザーメン処理したいならおマンコアクメしてアピールしてください♡

考えうる限りのひどい言葉を浴びせられて、頭のナカでパチパチ♡と気持ちいのがはじける♡

「おっ♡クラスしゅん♡イク♡無様イキするのみて♡イク♡イ……っ!」
鏡の前でおマンコ弄りに夢中になっていると、唐突にドアノブが回る。カラダが強張ったけれど、絶頂を迎えようとしていたカラダはすでに止まることができなく

てガクガクと震え始めた。

「え♡やだっ♡まって♡まってえ♡」

今絶頂してアクメしちゃうの絶対まずい♡それなのに、尿意に似たものがせりあがってきて止まらない♡

ガチャリ、と扉が開いたと同時に青い瞳と目が合う。茫然と目を丸くして立ち尽くすクラースの姿を見ながら、同時に透明な潮がちよろっ♡と漏れ出した。

「あゝっ♡やだやだ♡クラースしゃん、みちややだ♡やだっ♡イクところみられちゃうっ♡ごめんにやさいつ♡ごめんなしやいつ♡」

ぷしゅっ♡ぷしゅ♡ぷしゅ♡ああああ♡

透明な液体をまき散らしながら、腰が突き出る。結婚してから二人でセックスしたのは初夜の一度だけ。それもいたわるようなやさしいけれど義務的なセックスで、そのときはちゃんと貞淑に声を抑えていた。

その妻が、まさか自分が仕事で不在の間に、鏡の前でおマンコ広げてオナニーしてるなんて。

ああ、おわったな。

ちよろちよろ♡と抑えきれない潮が情けなく最後の一滴まで漏れ出した。

ひとしきり絶頂の快楽を味わったあと、絶望的な気分になる。でも、少し安心している自分もいる。これでもしかしたら愛してもらえるかもしれないという淡い希望をもって苦しむこともなくなるんだろう。

まともに顔も見れない、部屋にただよう沈黙が気まずい。なんといえはいいかわからないまま、言葉を探していたらクラスがためらいがちに声を掛けてきた

「……レティシアさん、なんて恰好してるんですか」

「あっ」

指摘されて自分がキャミソール一枚で、ショーツすら身に着けていなかったことを思い出す。

どこに脱いだかわからずに下着を探していると、骨ばった手が薄い布地を摘まみ上げた。

「ショーツ、ここにありますよ」

羞恥に顔が熱くなりながら手を伸ばせば、ひよいと薄い布地が遠のく。

「クラスさん？」

「……すごいな、こんなに愛液しみ込ませて。ボクが仕事でかまってあげられないとき毎晩こうしてたんですか？」

色が変わってしまっているクロッチ部分をまじまじと凝視されて、思わず俯いてしまう。

「あ、あまり見ないで……」

「どうしてですか？ さっきはかわいらしいおマンコを鏡に写しながらいやらしくオナニーしてたんですよ？」

クラスがジャケットを脱いで椅子に掛ける。困惑しながら見守っているとシャツのボタンに手を掛けていく。てっきり呆れて出ていくと思ってたのに、まるでわたしとセックスするために準備をしているみたいだ。

「え、なんで、服ぬいで……」

「寂しい想いをさせてしまったみたいですから、レティシアさんのことをかわいがってあげないと。ボクの名前、呼んでくれてましたよね」

ベルトを緩めてストラップスを寛げれば、膨らんだ屹立がぼるんと勢いよく飛び出した。ガチガチに勃起してそそり立つそれに、目が奪われてしまう。わたしの下品な声聞いて、興奮しちゃったんだと意識したらとたんに恥ずかしくなってくる。けれどもすきな人にどんな形であれ抱いてもらえると考えると、悲しいのに、ぞく

ぞくと興奮してきた。

「すごい♡ガチガチにそそりたってる……♡」

おなかにつきそうなくらい勃起したそれは、亀頭からダラダラ我慢汁流して早く女のナカにザーメンぶちまけたいっていつてる♡そっか、早くしたいから変態オナニーでアクメキメるドスケベ妻にも優しくしてくれるんだ♡

「クラスさんのそれ、わたしのおマンコで処理していいからね♡初夜はやさしく抱いてくれたけど、本当は我慢してたんでしょ？」

ガチガチに勃起したチンポの裏筋をつう♡と撫でる。そうしたらおもしろいようにピクピクと震えた。

「っ、レティシアさん……!」

「はは♡すごい♡ガチガチ♡これで容赦なく犯されるところ想像するだけでイキそうになっちゃう……♡」

脈打つそれを軽く手で抜きながら丸みを帯びた先端にちゅっ♡と口づけると雄の臭いが鼻孔をくすぐる。はじめてだからうまくできるかな、と不安に感じながら口に含もうとすると、突然強い力でカラダをはがされた。

「っ、レティシアさん、そんなことしないでいいです」

「あっ、ごめんなさい……」

突然の拒絶に、わたしは気に障ることをしてしまったのかと俯く。

「……ちがいます。触られるのがいやなわけではなく、あなたにお口でご奉仕なんてされたらすぐに出てしまいそうですから」

やさしく穏やかな声で囁かれながら髪を梳かれると、思わず困惑してしまう。まるで本当に大事な女の子に対する態度みたい。

ためらっていると、整った顔がゆっくり近づいてきてから唇に柔らかいものを押し当てられた。

「だっ♡ふっ♡んだ♡」

舌を絡ませあうキスをしながら、骨ばった手がいやらしく腰を撫でさすってくる。そして徐々に下へさがって、肉土手をふに♡とつままれた。

「ふふ、すっごくフニフニですね♡ボクの名前何度も呼びながらここかわいがってくれてましたね？ ボクにどんなことされる想像してこんなにびしょびしょにしたんですか？」

想像よりもやさしくて甘い声に混乱してしまう。お互いの唾液がぴちゃぴちゃといやらしい音を立てて、頭がぼうつとしていく。

「だあっ♡」

「ほら、ちゃんと教えてください」

キスの合間にやさしく命令されると、ぞくぞくと背筋が粟立ってしまう。穏やかな声なのに逆らえなくて、素直に白状した。

「っ♡クラースさんに、乱暴にされてっ♡やめてっって言ってもおかまいなしにおマ
ンコどちゅどちゅされて、おくちにっ♡ガチガチに勃起したチンポ押し込まれてっ
♡クチのなかでびゅーびゅーっ♡ってされて♡ザーメンごくごくさせられてえ♡」
卑猥な言葉が勝手に口からこぼれていく。キスの合間に目を細める彼は、とても
機嫌がよさそうだった。顔じゅうにキスされながら、クリトリスを二本の指でふに
ふに♡とやさしく揉みしだかれる。そんなことされたら、もっといやらしい肉豆が
勃起しちゃう♡鼻にかかった声を出せば、肉豆の裏筋をつう♡となぞられた。

「んおっ♡」

「うん♡それで♡どうなるんですか♡ちゃんとそのかわいい唇でおしえてくださ
い♡」

赤い舌がぺろぺろ♡と濡れた唇をなぞっていく。息がはしたなく荒くなって、我
慢でなくなる♡おマンコきゅんきゅん疼いて、早くこの熱を収めてほしくて、ど

んどん恥知らずになっていく♡

「それでっ♡たくさん、ナカに出されてっ♡クラスしゃんの気のすむまで抱いてもらって♡そのあとはピロートークもされないままにお掃除フェラさせられてっ♡追いがるわたしを引きはがして、クラスさんは眉一つ動かさずに部屋から出て行って、それでわたしが泣きながら自分でおマンコしゅるのお♡」

「……え？　なんて？」

クラスがクリトリスを撫でる指が止まる。ちらりと上目遣いで顔を見れば、困惑しているように固まっていた。

「どうしたの？」

「……レティシアさんの妄想のなかのボク、なんかひどい男じゃないですか？　妻と愛し合った後に同じベッドで寝るでしょう、ふつうは」

クラスがもつともな苦言を呈する。愛し合っている夫婦ならそうかもしれない

が、クラスは仕事で忙しいし、身体を重ねたのは一回切り。

「新婚のくせに仕事が忙しくてあなたをないがしろにしてしまったのは謝ります。でもボクは愛する人にそんな無体はしませんよ」

「……？ 愛する人？」

真摯に告げられた言葉はあまりにも現実みがない。幼いころから恋心を抱いていた人は必ず妹を好きになった。先に結婚したのも妹で、夫となった人にそれはそれは大切にされている。そして妹も大切にされる自分のことを当然のものとして受け入れている。

わたしには奇跡のように映るそれは、妹にとっては当たり前のことなのだ。わたしはずっとそれを悔しさやみじめさをなんとか押さえつけて黙って微笑んでいるだけ。

いままでも、これから。

そう思って生きていたから、夫の言葉になんて反応すればいいのかわからない。

「……そんな」

無理しなくていいのに、と喉元まで出かかって飲み込んだ。少なくとも夫は、わたしに紳士的な態度を取ってくれているのだから、それを否定するのは彼の面目を潰すことになる。たとえ家名目当てであっても、彼がわたしのことを大切にしたいというのなら今夜くらいは付き合ってあげなければ。

「……わたし、好きな人にひどいことをされるの想像すると、興奮しちゃって。でも、今夜はクラスさんのしたいようにわたしを抱いてほしいな」

不慣れながらに甘えるように細身だけれどもたくましい胸板に顔を埋めれば、筋肉越しに心臓の跳ねる音が聞こえた気がした。気のせいかな。

「わかりました。レティシアさん。ボクのしたいようにあなたを抱きますね」

にっこりと微笑むとまた整った顔が近づいてきてキスされる。そのままやさしく

ベッドに身体を沈められて、ぴとっ♡と秘裂に血管が浮き出ているたくましい肉竿を添えられた。

「あ」

なんだ、都合のいいことってやっぱり挿入したいんだ。

がっかりしたような安心したような複雑な気分になりながら、クラスを見つめる。

「まだ挿入れませんよ。レティシアさんに誤解されたくないですからね」

——誤解も何も、クラスがわたしを好きになる理由がなさすぎるので誤解ではないんだけどなあ。

そんなことを考えていると腰を引き寄せられて、ベッドの上に座っているクラススのほうへ引き寄せられる。雁首を勃起したクリトリスにぴとっ♡と押し当てられて、その熱さにとろお♡と愛液がしたたる♡

「あ♡」

「レティシアさんがボクの名前一生懸命呼びながらひとりエッチしてるの見て、こんなになっちゃったんですよ♡」

ゆっくり腰を前後に振られて、ずりゆっ♡ずりゆりゆっ♡と肉豆を押しつぶしながらチンポを擦りつけられる。ドクドクと脈打つのを感じ取って、またクリトリスが大きくなってきちゃう♡

「ん♡それっ♡クラスさんのおチンポビクビクっ♡ってしてるのかんじちゃう♡」

「ああ♡かわいい♡素股きもちいいですね♡レティシアさんのおマンコ熱くてぬるぬるで本当にかわいいですよ♡」

かわいい♡かわいい♡と囁かれながらクリトリスを熱くて硬いチンポでずりゆずりゆ擦られたら、おマンコが照れてブルブルして震え出しちゃう♡

「くっ、かわいいっていうの、やだっ」

「ん？ どうしてですか」

「そんなこといわれたら、どうすればいいのかわからなくなっちゃう……」

ひどい言葉をいわれる準備ならいつでも出来てるのに、そんなふうにあまやかされるとうすればいいかわからない♡想像とあまりに違いすぎて、戸惑って心臓がドキドキしてしまう。

「かわいっていわれるだけで、照れちゃうんですか？　ほんとうにかわいい人だなあ。ボクのことと思ってあんな大胆なオナニーしてたのに、かわいいっていわれるのダメなんだ？」

少し碎けた口調になった夫は、腰をゆっくりと動かしながわたしの顔を見つめる。欲情してギラついた瞳と視線がかち合って、ビクっ♡と腰が跳ねた。

「ダメですよ、レティシアさん。逃げちゃ。あなたがボクのこと信じてくれるまで、

逃げちゃダメ」

「あっ♡」

ねっとりお互いの粘膜を擦り合わせれば、ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡という卑猥な水音が響く。クラーズのあったかい肉竿がビクビク震えながら、わたしのおマンコに先走りを塗り付けていく♡これから種付けするためにマーキングしてるみたいで、おマンコが痙攣してしまう♡

「はは♡レティシアさんのおマンコピクピク〜♡っ♡っ♡っ♡してますね♡トロトロで熱くてとってもきもちいいですよ♡ぷにぷにのマン肉がボクのチンポ包み込んで、きもちよくしてくれてます♡レティシアさんも、レティシアさんのおマンコも擦り付けるたびに濡れちゃって、健気でかわいいです♡」

かわいい♡かわいい♡と囁かれながら、熱い粘膜を擦り合わせられて頭に気持ちいいのと甘い言葉が同時に流れ込んでくる♡

——だめだ、これ♡

本当にクラスがわたしのこと好きなんだって勘違いしそうになる♡こんな素敵な人がわたしのこと好きになるはずなのに、勘違いしちゃ♡好きになったら傷つくだけなの♡もう傷つきたくないの♡

「あ♡や、やだ♡♡クラスさん♡♡は、早く挿入れて♡♡お、おねがい♡♡子宮せつないの♡♡はやくクラスしゃんので、奥トントン♡♡してほしいの♡♡」

恥も外聞もかなぐり捨てて張り詰めた肉竿を撫でておねだりする。クラスは切なさそうに眉をひそめたが、それでもお願いをきいてはくれないかった。

「だーめ♡今日はボクの好きなようにする♡♡て言いましたよね♡♡だから、まだおあずけです。いっしょにイチヤイチャセックスしましょ♡♡」

ぐにゅ♡♡とガチガチのチンポがクリトリスを押しつぶしたまま、両手でおっぱいを寄せられてやさしく揉みしだかれる。骨ばった手がやわらかい肉に食い込むの

を見て男の人におっぱい揉まれてるんだって状況を自覚して、いまさらなのにドキドキしてしまう。いつも自分で寂しくもみもみ♡してたおっぱい、クラスに揉まれちゃってるんだ♡想像の夫じゃなくて本人の手は、想像よりもずっとあたたかくてやさしい♡

「あ♡」

「おっぱいも寂しそうにしてるから、よしよししてあげないと♡乳首がキャミソール押し上げてぽちっ♡ってなってますよ♡」

先っぽを指の腹ですりすり♡されて、じわじわとした気持ちよさが腰に溜まっていく。切なさ思わず腰をくねらせれば、ぐにゅっ♡と硬い肉豆がチンポに押しつぶされて、喉を反らしてしまう♡

「んひっ♡」

「あれ、どうしたんですかレティシアさん♡乳首すりすり♡されて腰にくねらせて

自分でおマンコ刺激しちゃいました？ 素股気に入ってくれたんですね♡ほら、もーっとたくさんぐちゅぐちゅ♡ってしてあげますからふたり一緒に気持ちよくなりましょ♡」

ぺろん♡とキャミソールをまくられて、ぷるん♡とおっぱいがまろび出る。ぷくっ♡と勃起した乳首を両手できゅっ♡と摘ままれてシコシコされながら、夫が腰を前後に突き出す。反り立ったチンポがクリトリスをめぐり上げるように引っかいて、ビリビリとした気持ちいのが脊髄を通して頭を揺さぶる。亀頭で芯を持ったクリを引っ搔かれるたびに腰がガクガク♡って勝手に震えちゃう♡

「ひゅっ♡クラスしゃんっ♡おっぱいとクリいっしょにいじるのらめっ♡」

「ふふ、そういうときはダメじゃなくてきもちいい♡って教えてください♡」

愛液と先走りでトロトロのクリトリス、ずりゆずりゆされながら、乳首もぎゅう♡と指で搾られて、根元から先端まで抜かれるときもちよすぎてわけがわからなく

ない♡

「~~~~♡しよれっ♡これえ♡らめっ♡きもちいい♡きもちいい♡」

おマンコの粘膜とクリトリスがぶるぶる♡って震えて、乳首もこりゅこりゅになって、オナニーなんて比べ物にならない♡こわい♡きもちよすぎてこわい♡

「や、クラスちゃん、へん♡わたしのからだ、へんなのっ♡こんなのしらないっ♡こわいっ♡こんなきもちいいことされると、クラスちゃんのこと、もっとすきになっちゃう♡」

腕を掴んでいやいやと首をふれば、がっしりと腰を掴まれてクラスの腰を動きが激しくなる♡

「おや、うれしいこと言ってくださいますね♡いいですよ♡もっとすきになってください♡」

おなかの奥がきゅう♡と熱くなって、尿意に似た感覚がぶるぶる♡とおマンコ

を震わせている♡でちゃう♡えっちな素股されながら、潮吹きアクメしちゃう♡
「あっ♡クラスさ、ああ♡でちゃうっ♡イク♡も、イクっ♡ガチガチチンポでク
リトリスずりゆずりゆされてっ♡潮吹きアクメしゆるっ♡クラスさんのカラダ
にかかっちゃう♡おねがいっ♡イっっちゃうからこしとめてえっ♡」